

## 渡邊 晃・藤原悌三両教授の御退官によせて

渡邊晃先生は平成10年3月31日をもって京都大学を停年退官され、また藤原悌三先生は任期2年を残して同じく平成10年3月31日に京都大学を退職され、それぞれ同年4月1日付をもって京都大学名誉教授とされました。両先生には長年にわたり防災研究所における研究と発展に多大のご尽力をいただきましたが、両先生のご功勞に対しまして、所員一同心から感謝の意を表します。

渡邊晃先生は、福岡県立戸畑高校を卒業されたのち京都大学理学部地球物理学科へ入学され、昭和32年3月に同学科を卒業されました。その後、同大学院理学研究所に進学され、昭和36年3月に修士課程を修了されたのち同年4月に博士課程に進まれ、昭和38年3月に同課程を中途退学されて、同年4月に京都大学理学部助手に採用されました。昭和50年3月に同助教授に昇任され、平成2年6月に京都大学防災研究所に配置換となり、平成4年7月に教授に昇任されました。なお、昭和40年3月には論文題目「On the Sequence of Earthquakes (地震の系列について)」により京都大学理学博士の学位を授与されています。

この間、先生は、理学部附属地震予知観測地域センターにおきまして近畿地方の地震活動の観測・研究の発展を図られ、防災研究所附属地震予知研究センターの設立後は地震活動研究領域を担当され、同センター阿武山観測所および徳島観測所の管理・運営に当られるとともに、西日本の広域の地震観測網を統括されるなど、地震予知研究の推進に大きく貢献されました。

渡邊晃先生は、学術研究および教育の各分野におきまして多くの業績を挙げられますとともに、大学の管理運営面におきましても多大の貢献を果たされましたが、主なご功績を示しますと次の通りであります。

研究面におきましては、微小地震や極微小地震活動の観測方式を開発・発展させられ、阿武山地震観測網を構築されて高精度の微小地震観測を行われ、現在の地震テレメータ観測の基礎を築かれました。この観測網での結果を用いて、微小地震の発生機構と微細テクトニクスに関する理論的研究や、地震系列のエネルギー開放機構とそのモデル化の研究、グーテンベルグ・リヒターのb値と地震活動度に関する統計的研究を行われるなど、地震学会の微小地震研究グループの中心として活躍されました。特に微小地震のマグニチュードに関する研究は現在も「渡邊のマグニチュード」として工学分野も含めた広い範囲で地震活動の指標とされています。また、近隣の東京大学観測網や高知大学観測網などとの共同研究により南海ネットワークを構築され、西日本の広域にわたる地震活動やフィリピン海プレートの形状に関して先駆的な研究成果を挙げられました。また平成7年の兵庫県南部地震の発生に際しましては、地元大学の観測網の責任者として各研究機関へ基礎データを積極的に提供されるなど、地震観測の中心的役割を果たされました。

一方、教育面におきましては、大学院理学研究科の指導教授として多くの大学院生の教育と研究指導を行われ、後継研究者の育成に努められました。

また日本地震学会、日本火山学会、アメリカ地震学会などの会員として活発な学会活動を行われ、特に昭和43年から45年には地震学会委員および学会誌編集長として学会の発展に貢献されました。また平成4年から6年には測地学審議会地震火山部会委員(第22期)を務められ、地震予知計画の立案・策定に大きく寄与されました。さらに東京大学地震研究所地震予知研究協議会委員や地震予知連絡会委員なども務められ、地震予知研究の推進に大きな役割を果たされました。

藤原悌三先生は、京都府立洛北高校を卒業されたのち京都大学工学部建築学科へ入学され、昭和35年3月に同学科を卒業されました。その後、昭和41年3月まで(株)大坂建築事務所に勤務されましたが、この間の昭和39年4月に京都大学大学院工学研究科に入学され、昭和41年3月に修士課程を修了されたのち同年4月に博士課程に進まれました。昭和42年10月に同課程を中途退学されましたが、直ちに京都大学工学部助手に採用され、昭和48年12月に講師に昇任されました。昭和54年7月に京都大学防災研究所に配置換されて助教授に昇任され、さらに昭和60年8月に教授に昇任されました。平成10年3月に退職され、同年4月から滋賀県立大学環境科学部教授を務めておられます。なお、昭和53年9月には論文題目「建築架構の地震応答とその構成部材の耐震安全性に関する研究」により京都大学工学博士の学位を授与されています。

防災研究所では、昭和60年から脆性構造耐震研究部門の部門主任を務められ、平成8年からは改組された総合防災研究部門の都市空間安全制御分野のご担当となり、耐震工学・都市防災工学の研究を推進されてきました。

藤原悌三先生は、学術研究および教育の各分野において多くの業績を挙げられますとともに、大学の管理運営面におきましても多大の貢献を果たされましたが、主なご功績を示しますと次の通りであります。

研究面におきましては、建築構造物の耐震安全性向上の理論的・実験的研究を進められ、多次元地震動入力が作用する構造物の多次元非線形挙動について確定論的・確率論的な研究を行われ、振動実験によって解法の妥当性を検証され、非線形領域における構成部材の適正耐震設計法を導出されるなど、耐震工学上の基礎的な研究を行われました。また地震工学・耐震工学の深い知見に国内外の地震災害の調査・分析結果を加えられ、都市域の地震被害の論理的な予測手法を提示されるとともに、構造被害・室内被害と生活支障との関連の調査分析や実験検証を行われるなど、総合的都市防災計画手法について精力的に研究されました。

一方、教育面におきましては、大学院工学研究科の指導教官として多くの大学院生の教育と研究指導を行われ、専門技術者の養成と後継研究者の育成に努められました。

また日本建築学会、自然災害学会などの会員として活発な学会活動を行われ、評議員、専門委員会幹事などを歴任されるなどして学会の発展に尽力されました。さらに国内外の地震災害調査研究では調査団長として調査報告の編集を担当されるとともに、地震防災に関する日中共同研究の主宰、国際誌の編集などを通じて国際学術研究の発展にも貢献されました。このほか、京都市防災会議専門委員会、鳥取県有識者会議などの委員として自治体の防災行政に協力されるとともに、日本建築センター高層建物評定委員会委員、滋賀県建築物耐震診断委員会委員長等を務められ、都市建築物の耐震性向上にも貢献されました。

以上のように、渡邊晃先生および藤原悌三先生はいずれも学術研究ならびに教育の各分野におきまして多くの優れた業績を挙げられ、大学の管理運営面におきましても多大の貢献を果たしてこられました。

防災研究所は、平成8年度に5大研究部門・5センターへの改組ならびに全国大学の共同利用研究所への移行が認められたのに加え、平成9年度には卓越した研究拠点（COE）に認定されるなど、目覚ましい発展を遂げてきました。今後は、これらの発展を研究活動にいかに関与させ、どのような成果を挙げるかが問われることとなります。

このように重要な時期に、深い学識と豊かな経験をお持ちの両先生が退官されますことは防災研究所にとりまして大きな痛手であり、誠に残念でございますが、残された所員一同は防災研究所の発展のためさらに奮励努力することにより両先生のご労苦に報いたいと存じます。

どうぞ、渡邊晃先生、藤原悌三先生におかれましては、今後ともご健康に恵まれ、新たな環境でますますご活躍されることをお祈りいたしまして、感謝の言葉とさせていただきます。

有り難うございました。

平成10年5月

京都大学防災研究所長  
今 本 博 健